住井すゑとその文学の里（三十三）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

牛久沼のほとりで始まった犬田一家の日々の営み

昭和10年（1935年）の夏。

犬田一家は卯の実家所在地稲敷郡牛久村大字城中に引っ越して来た。

間もなく夏休みが終わり、住井は、章、かほる、れい子を連れて牛久村立尋常小学校への転校手続きを取った。牛久の尋常小学生は男も女も着物で、男は皆丸刈りであった。そんなところに現れた洋装の住井、半ズボンに坊ちゃん刈りの章、スカートのかほるとれい子らは好奇の目にさらされた。章の同校卒業写真には着物姿の中に彼一人がセーター姿で写っている。卯には茨城県南なまりが少し残っていたが、4人の子どもたちは東京弁で茨城県南なまりには戸惑った。茨城県南なまりと一口にいうが、昭和40年（1965年）代までは、筑波町（現つくば市）や、小貝川を渡った石下町（現常総市）には牛久とは全く異なる独特のなまりがあったものだ。章は同級生たちに『イシラ（おめえら）』と言われたが意味が全く分からなかった。適当に答えておくと今度は『ゴチャラッペ（いいかげんなこと）言うな』とくる。さらには『チクヌクナ（うそつくな）』とくるのだった。

でも、子どもたちは牛久村の生活にすぐになじみ、犬田家に地元の子どもたちが遊びに来るようになった。戦時体制下の昭和16年（1941年）に尋常小学校初等科6年と高等科2年の課程が国民学校に改められた。大字新地に生まれた中島清治氏（牛久音頭・河童ばやしの作詩者）の思い出話によれば、牛久国民学校在学中の昭和17年か、あるいは18年だったか、近所の上級生（住井の二男充と同級生だった）中島正志氏にくっついて犬田家に遊びに行った。犬田家の庭には梅の木があった。その梅の木の下に充、上級生の中島正志氏らと中島清治氏が車座になって住井がおやつ代わりに出してくれた小皿に盛られた赤飯をほお張りながら、少年少女雑誌（住井も童話を寄稿していた）や小説を借りて読んだことがあったそうだ。

ところで犬田家の長男章には役目があった。それはすぐ裏の家小川家（芋銭宅）で水をもらってくることだった。両端に井戸水をいっぱい入れたバケツをつるしててんびん棒で担ぐのであるが、バランスを取るのがなかなか難しかった。

卯は春先持病のぜんそくの発作に苦しんでいたが、冬場、関東の紫峰筑波山から乾燥した北風が吹き下ろしてくる快晴の日には、田舟（たぶね）を牛久沼の沖合にこぎ出して寒ブナを捕った。長女かほるの話によれば、卯の場合は、牛久沼の漁法の一つである手綱で寒ブナをすくい捕る見取りという漁法だった。

昭和40年（1965年）代まで、霞ケ浦の夏から冬にかけてのワカサギやシラウオなどを捕る帆引き船が風物詩だったが、牛久沼においても四季を通して田舟による漁獲が見られた。田舟は冬場ハンターが狩猟にも用いていた。

牛久沼の浮田

牛久沼には城中岸側と、新地岸側および庄兵衛新田岸側に浮田が点々としていた。浮田は水面に浮いた田んぼのことで、総面積は牛久沼全域（旧茎崎町域を含む）で180町歩に及んだ。浮田は水中にくいを打ち込んでおおむね細長い形に囲み、囲みの中にケト（沼内のマコモが腐って岸辺にたい積していた）をのこぎりで切り取って沈め、さらにその上に沼底からすくい上げた泥をかぶせて造成したものだ。昭和50年（1975年）着工の土地改良で浮田は姿を消した（小面積を残すのみ）。

⬆牛久沼の浮田の写真

⬆牛久沼と田舟の風景画『冬の牛久沼』
作者　倉貫三二氏
寄贈者　蔵持実氏

◎2点とも三日月橋生涯学習センター内に掲示されている。